



詩人

五至歌

下



聖簡

古今人ある部 結之部 目錄

時傳之部

名月	神	中	二	中	二	神	三
三日月	三	結	曲	十	曲	後	曲
星の夜	五	結	五	文	五	星	五
星の夜	五	結	六	七	六	星	六
川	七	一	七	形	七	千	七
七の夜	七	三	七	心	八	千	八
送火	八	半	八	柳	九	蓮	九
星の夜	九	生	九	盆	九	抄	十
星の夜	十	心	十	残	十	中	十

秋魚	十二	仲子入	十二	紅解ゆ	十二	控系心	十二
秋魚	十二	西銘	十二	雲芳	十二	後の草入	十二
二百十日	十三	縮葉	十四	野分	十四	早縮	十五
秋魚	十五	本縮取	十五	田菊	十五	秋縮	十五
冬草	十六	後ひき	十六	洋草入	十六	秋縮	十六
八朔	十六	狗草初途	十六	放生命	十七	秋縮	十七
鳴子	十七	雲山子	十七	引板	十八	秋縮	十八
さび結	十八	おしき葉	十八	秋縮	十八	秋縮	十八
河津	十九	鏡	十九	秋縮	十九	秋縮	十九
外の布	十九	秋縮	十九	秋縮	十九	秋縮	十九
秋縮	二十	秋縮	二十	秋縮	二十	秋縮	二十
長生	二十	秋縮	二十	秋縮	二十	秋縮	二十

秋魚	十二	若きはこ	十三	秋の草	十三	秋の草	十四
一草	十四	秋の部	十四	秋の草	十四	秋の草	十四
秋魚	十五	秋の部	十五	秋の草	十五	秋の草	十五
蔓草	十六	秋の部	十六	秋の草	十六	秋の草	十六
秋魚	十七	秋の部	十七	秋の草	十七	秋の草	十七
縮の草	十八	秋の部	十八	秋の草	十八	秋の草	十八
蓮の草	十九	秋の部	十九	秋の草	十九	秋の草	十九
桔梗	二十	秋の部	二十	秋の草	二十	秋の草	二十
あつた	二十一	秋の部	二十一	秋の草	二十一	秋の草	二十一
秋魚	二十二	秋の部	二十二	秋の草	二十二	秋の草	二十二
うら枯	二十三	秋の部	二十三	秋の草	二十三	秋の草	二十四

好く	三十四	草	三十五	乃列	三十五	か	三十五
木犀	三十五	木の葉	三十五	葉	三十六	核のこ	三十五
木の子	三十五	草	三十五	葉	三十六	葉	三十六
虫	三十七	秋の蟬	三十八	葉	三十八	秋の葉	三十七
秋の蟻	三十七	秋の蚊	三十七	葉	三十八	葉	三十八
さるくす	三十八	ちくち	三十九	葉	三十九	葉	三十九
ひあこ	三十九	ひあこ	四十	葉	四十	葉	四十
せちま	四十	野	四十	葉	四十	葉	四十
帰る	四十	野	四十	葉	四十	葉	四十
鳩	四十一	鳩	四十一	葉	四十一	葉	四十一
冬を結	四十二	秋の蟻	四十二	葉	四十二	葉	四十二

古人五言歌 冬之部目錄

初雪	二	雪	三	雪	三
雪の	四	雪	六	雪	六
雪	六	雪	七	雪	七
時修之部					
小春	八	雪	九	雪	九
秋送	九	秋	九	秋	十
子	十	秋	十	秋	十
十	十	秋	十	秋	十

冬目一	十一	冬取紙	十一	冬取紙	十一	冬取紙	十一
冬目二	十二	冬取紙	十二	冬取紙	十二	冬取紙	十二
冬目三	十三	冬取紙	十三	冬取紙	十三	冬取紙	十三
冬目四	十四	冬取紙	十四	冬取紙	十四	冬取紙	十四
冬目五	十五	冬取紙	十五	冬取紙	十五	冬取紙	十五
冬目六	十六	冬取紙	十六	冬取紙	十六	冬取紙	十六
冬目七	十七	冬取紙	十七	冬取紙	十七	冬取紙	十七
冬目八	十八	冬取紙	十八	冬取紙	十八	冬取紙	十八
冬目九	十九	冬取紙	十九	冬取紙	十九	冬取紙	十九
冬目十	二十	冬取紙	二十	冬取紙	二十	冬取紙	二十

山王祭之部

冬目一	十一	冬取紙	十一	冬取紙	十一	冬取紙	十一
冬目二	十二	冬取紙	十二	冬取紙	十二	冬取紙	十二
冬目三	十三	冬取紙	十三	冬取紙	十三	冬取紙	十三
冬目四	十四	冬取紙	十四	冬取紙	十四	冬取紙	十四
冬目五	十五	冬取紙	十五	冬取紙	十五	冬取紙	十五
冬目六	十六	冬取紙	十六	冬取紙	十六	冬取紙	十六
冬目七	十七	冬取紙	十七	冬取紙	十七	冬取紙	十七
冬目八	十八	冬取紙	十八	冬取紙	十八	冬取紙	十八
冬目九	十九	冬取紙	十九	冬取紙	十九	冬取紙	十九
冬目十	二十	冬取紙	二十	冬取紙	二十	冬取紙	二十

掲	三十二	ゆん	三十三	ゆん	三十四	ゆん	三十四
冬	三十四	ゆん	三十五	ゆん	三十五	ゆん	三十五
冬	三十五	ゆん	三十六	ゆん	三十六	ゆん	三十六
冬	三十六	ゆん	三十七	ゆん	三十七	ゆん	三十七
冬	三十七	ゆん	三十八	ゆん	三十八	ゆん	三十八
冬	三十八	ゆん	三十九	ゆん	三十九	ゆん	三十九
冬	三十九	ゆん	四十	ゆん	四十	ゆん	四十
冬	四十	ゆん	四十一	ゆん	四十一	ゆん	四十一
冬	四十一	ゆん	四十二	ゆん	四十二	ゆん	四十二
冬	四十二	ゆん	四十三	ゆん	四十三	ゆん	四十三
冬	四十三	ゆん	四十四	ゆん	四十四	ゆん	四十四
冬	四十四	ゆん	四十五	ゆん	四十五	ゆん	四十五
冬	四十五	ゆん	四十六	ゆん	四十六	ゆん	四十六
冬	四十六	ゆん	四十七	ゆん	四十七	ゆん	四十七
冬	四十七	ゆん	四十八	ゆん	四十八	ゆん	四十八
冬	四十八	ゆん	四十九	ゆん	四十九	ゆん	四十九
冬	四十九	ゆん	五十	ゆん	五十	ゆん	五十
冬	五十	ゆん	五十一	ゆん	五十一	ゆん	五十一
冬	五十一	ゆん	五十二	ゆん	五十二	ゆん	五十二
冬	五十二	ゆん	五十三	ゆん	五十三	ゆん	五十三
冬	五十三	ゆん	五十四	ゆん	五十四	ゆん	五十四
冬	五十四	ゆん	五十五	ゆん	五十五	ゆん	五十五
冬	五十五	ゆん	五十六	ゆん	五十六	ゆん	五十六
冬	五十六	ゆん	五十七	ゆん	五十七	ゆん	五十七
冬	五十七	ゆん	五十八	ゆん	五十八	ゆん	五十八
冬	五十八	ゆん	五十九	ゆん	五十九	ゆん	五十九
冬	五十九	ゆん	六十	ゆん	六十	ゆん	六十
冬	六十	ゆん	六十一	ゆん	六十一	ゆん	六十一
冬	六十一	ゆん	六十二	ゆん	六十二	ゆん	六十二
冬	六十二	ゆん	六十三	ゆん	六十三	ゆん	六十三
冬	六十三	ゆん	六十四	ゆん	六十四	ゆん	六十四
冬	六十四	ゆん	六十五	ゆん	六十五	ゆん	六十五
冬	六十五	ゆん	六十六	ゆん	六十六	ゆん	六十六
冬	六十六	ゆん	六十七	ゆん	六十七	ゆん	六十七
冬	六十七	ゆん	六十八	ゆん	六十八	ゆん	六十八
冬	六十八	ゆん	六十九	ゆん	六十九	ゆん	六十九
冬	六十九	ゆん	七十	ゆん	七十	ゆん	七十
冬	七十	ゆん	七十一	ゆん	七十一	ゆん	七十一
冬	七十一	ゆん	七十二	ゆん	七十二	ゆん	七十二
冬	七十二	ゆん	七十三	ゆん	七十三	ゆん	七十三
冬	七十三	ゆん	七十四	ゆん	七十四	ゆん	七十四
冬	七十四	ゆん	七十五	ゆん	七十五	ゆん	七十五
冬	七十五	ゆん	七十六	ゆん	七十六	ゆん	七十六
冬	七十六	ゆん	七十七	ゆん	七十七	ゆん	七十七
冬	七十七	ゆん	七十八	ゆん	七十八	ゆん	七十八
冬	七十八	ゆん	七十九	ゆん	七十九	ゆん	七十九
冬	七十九	ゆん	八十	ゆん	八十	ゆん	八十
冬	八十	ゆん	八十一	ゆん	八十一	ゆん	八十一
冬	八十一	ゆん	八十二	ゆん	八十二	ゆん	八十二
冬	八十二	ゆん	八十三	ゆん	八十三	ゆん	八十三
冬	八十三	ゆん	八十四	ゆん	八十四	ゆん	八十四
冬	八十四	ゆん	八十五	ゆん	八十五	ゆん	八十五
冬	八十五	ゆん	八十六	ゆん	八十六	ゆん	八十六
冬	八十六	ゆん	八十七	ゆん	八十七	ゆん	八十七
冬	八十七	ゆん	八十八	ゆん	八十八	ゆん	八十八
冬	八十八	ゆん	八十九	ゆん	八十九	ゆん	八十九
冬	八十九	ゆん	九十	ゆん	九十	ゆん	九十
冬	九十	ゆん	九十一	ゆん	九十一	ゆん	九十一
冬	九十一	ゆん	九十二	ゆん	九十二	ゆん	九十二
冬	九十二	ゆん	九十三	ゆん	九十三	ゆん	九十三
冬	九十三	ゆん	九十四	ゆん	九十四	ゆん	九十四
冬	九十四	ゆん	九十五	ゆん	九十五	ゆん	九十五
冬	九十五	ゆん	九十六	ゆん	九十六	ゆん	九十六
冬	九十六	ゆん	九十七	ゆん	九十七	ゆん	九十七
冬	九十七	ゆん	九十八	ゆん	九十八	ゆん	九十八
冬	九十八	ゆん	九十九	ゆん	九十九	ゆん	九十九
冬	九十九	ゆん	百	ゆん	百	ゆん	百

古入五音韻向系

獲之部

南強 曠地菴龜足 行母惠、瓜、抄 校合

冬 月

冬月や法をめぐりて物事すか
明月や門をまじりて事な
之井ちの所をまじりて事
冬月や法をめぐりて物事すか
明月や門をまじりて事な
之井ちの所をまじりて事

其角 嵐寺

明

名もや標よりよりまき雲のかく
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう

去来 秋人 柳風 李由 輪士 信徳 昌彦 少彦 智彦 利牛 孫彦 柳片

秋社下

存

名もや標よりよりまき雲のかく
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう
名もやも影うらうまき標より
明のまきを標の影も影うらう

秋風 孫彦 柳片 昌彦 少彦 智彦 利牛 孫彦 柳片

見ぬ 見ぬ

雪舟のくし人を体と見んか
まづおろくもくまふそと見んか
おろくとありまはねておろく
蜀道はのききまふおろく見んか
川原の白雲をありくおろく
麻かきを踏新道たのおろく
あつたの歌きくおろく見んか
舟の道はくまふそと見んか

去来 雪舟 西条 杉風 源代 支考 文學 越人

ぬ

ふんぬ影やまふし行旅も舟ぬぬ
ふんぬ人のまふ旅の種や舟のく
岩壁やまふまふひりぬぬのま
おろくまふまふおろくのひりぬ
ふんぬをまふまふおろくのぬ
山まふまふまふまふのおろく
まふまふまふまふおろくのぬ
おろくまふまふまふおろくのぬ
はまふまふまふまふおろくのぬ
まふまふまふまふおろくのぬ
おろくまふまふまふおろくのぬ
おろくまふまふまふおろくのぬ

舟 去来 雪舟 西条 杉風 源代 支考 文學 越人

秋

たつたやむるに秋のあそび
秋葉と月夜をみる神の
さしゆくはくはく言のまはる
人も人もさるる秋のうら
秋葉のうらまのうらまの

秋
葉
さ
る
る
う
ら
ま
の
う
ら
ま
の

之

何事のんそらも似て
この秋の氣志のうらまの
さしゆくはくはく言のま
人も人もさるる秋のうら
秋葉のうらまのうらまの

何
事
の
ん
そ
ら
も
似
て
こ
の
秋
の
氣
志
の
う
ら
ま
の
う
ら
ま
の

秋

秋のあそびはくはく言のま
秋葉と月夜をみる神の
さしゆくはくはく言のま
人も人もさるる秋のうら
秋葉のうらまのうらまの

秋
の
あ
そ
び
は
く
は
く
言
の
ま
秋
葉
と
月
夜
を
み
る
神
の
さ
し
ゆ
く
は
く
は
く
言
の
ま
人
も
人
も
さ
る
る
秋
の
う
ら
ま
の
う
ら
ま
の

秋のあそびはくはく言のま
秋葉と月夜をみる神の
さしゆくはくはく言のま
人も人もさるる秋のうら
秋葉のうらまのうらまの

秋
の
あ
そ
び
は
く
は
く
言
の
ま
秋
葉
と
月
夜
を
み
る
神
の
さ
し
ゆ
く
は
く
は
く
言
の
ま
人
も
人
も
さ
る
る
秋
の
う
ら
ま
の
う
ら
ま
の

十の友 海の時

ひさしおのわあしういさきく宛の心を
句独よひさきうふのあひまうり
ひさしおのわあしういさきく宛の心を
十のおわあしういさきく宛の心を
ひさしおのわあしういさきく宛の心を
神の代よひさきういさきく宛の心を
本意のわあしういさきく宛の心を
葉のわあしういさきく宛の心を
根のわあしういさきく宛の心を
空のわあしういさきく宛の心を
海の時をいさきく宛の心を

大来
明
猿
乙中
作不詳
多
新
支考
西
海
大来

星の夜

ひさしおのわあしういさきく宛の心を
句独よひさきうふのあひまうり
ひさしおのわあしういさきく宛の心を
十のおわあしういさきく宛の心を
ひさしおのわあしういさきく宛の心を
神の代よひさきういさきく宛の心を
本意のわあしういさきく宛の心を
葉のわあしういさきく宛の心を
根のわあしういさきく宛の心を
空のわあしういさきく宛の心を
海の時をいさきく宛の心を

大来
明
猿
乙中
作不詳
多
新
支考
西
海
大来

新田

其の老秋海峯中世より
通々の格に結る母と新田

新田
杉候

文

文の中より日暮の意は
ぬきぬきひくくはる娘の子

其年
千子

葉

い日の夕暮を渡る人止
いのちの輪のまをを

千子
去来

葉

秋葉も白ははかすよれ
志の葉のまをの輪を

其年
何代

秋

秋葉のまをの輪を
志の葉のまをの輪を
い日の夕暮を渡る人止
いのちの輪のまをを
秋葉も白ははかすよれ
志の葉のまをの輪を
い日の夕暮を渡る人止
いのちの輪のまをを

其年
千子
去来
何代

七 又

三 琴

おきぬ中よりお針をさかぬさうめのお
毎のそとを指しつゝお平をむく
針もよこせむの夜の明もすし
せうや中野川にさあゆふは
ふあはちかたをささおまを
ふとちかたを指して指子入
大内の御まをさおまをさあ
おまをささうあまのつらさう
ささかたをささうあまをささ
ささかたをささうあまをささ
ささかたをささうあまをささ

菊
其角
猪籠
嵐雪
山柳
千子
乙中
乙中
乙中

て 川

静 務

頼
の
糸

大砂おねおねより一三川
生のお中おぬりのよふ大川
けいおく雅くそとちあはの川
おまはかろ流るるる
あまのりく流るる流るる
流るるのよふあまのりく

其角
嵐雪
本園
乙中
乙中
乙中

おまのりく流るる流るる
かたまたの務やあまのりく
おまのりく流るる流るる
おまのりく流るる流るる
おまのりく流るる流るる

其角
乙中
嵐雪
乙中
乙中
乙中

千 蘭 方

金魚のうろこ鮎のうろこにあらうのうろこ
うろこあらうのうろこうろこあらうのうろこ
うろこあらうのうろこうろこあらうのうろこ
うろこあらうのうろこうろこあらうのうろこ

椿子
白雲
馬車
甲斐

棋 待

松林ゆえのさかたの家のののの
甘くうろこうろこ人をもやうあう
うろこうろこ松林のうろこうろこ

鴨
修
林

二 灯 筆

うろこうろこ筆を物うろこうろこ
うろこうろこ筆よりうろこうろこ筆を
うろこうろこ筆のうろこうろこ筆を
うろこうろこ筆のうろこうろこ筆を

あ那
探
蓮

竹 筆 送 中

見るともわう竹筆のまのまの
白法のうろこうろこ筆のうろこ
うろこうろこ筆のうろこうろこ筆の
うろこうろこ筆のうろこうろこ筆の
うろこうろこ筆のうろこうろこ筆の
うろこうろこ筆のうろこうろこ筆の

其角
忠
未
山
山
山
山
山

云見

五示

玉やうくくも焼塔のりふり
はさうくくも焼塔のりふり
玉やうくくも焼塔のりふり
はさうくくも焼塔のりふり
玉やうくくも焼塔のりふり
はさうくくも焼塔のりふり
玉やうくくも焼塔のりふり
はさうくくも焼塔のりふり

了母
去来
火妙
酒半
北枝
雲守
山岳

柳經

蓮飯

精兵の好色一一人を安めり
貴府にまきぬ親き一玉やう
裸柳の奥まわり一や親の親
中ははらや志し終を捨て獲の
けふの人もん又も法玉やう

大子
紫風
去来
多岐
而明

柳經や多まハ一をやま獲ひお
中て柳經にまきのまきハ分ち坊さ
おまは柳やうぬ西たう柳うり
柳經やうぬ西たう柳うり
柳のまきにまきハ分ち坊さ
おまは柳やうぬ西たう柳うり

如れ
去来
火妙
酒半
北枝
雲守
山岳

墨 信

生 舟 雲

金 舟 舟

家あり皆扶子志く後のは墨を糸
入し人も孫子とわうてさうを糸
白珠を糸の種やる墨を糸
灯の電の光も墨を糸お世世
牛の舟魂の光も糸お世世
世めて糸の光も糸お世世
たの糸も糸の光も糸お世世
糸も糸の光も糸お世世
糸も糸の光も糸お世世

いの 去来 具角 一笑 其角 方山 波村 龜洞 素中 四王 歌白

痛 如 瓜

一ちりて痛人ゆもた地やう
痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛

痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛
痛も痛の痛の痛の痛の痛

其角 許心 係角 去来 其角 去来 其角 去来

火 残 暑

てあるは火の写りなり
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の

火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の
 火の次をいふは火の

具角
 火の次
 火の次
 火の次
 火の次
 火の次

火の次
 火の次
 火の次
 火の次
 火の次
 火の次

相 撲

よるは名の残りの中
 角力取ふは火の
 角力取ふは火の
 角力取ふは火の
 角力取ふは火の
 角力取ふは火の

具角
 火の次
 火の次
 火の次
 火の次
 火の次

秋十

風 録

あかこしとむるはせぬも秋の風
 牛部屋子蚊の巻子よハ蜂乃風
 かたけつゝぬらぬとあゝ歯かあまの風
 秋風や志々事ありに結ならしむ
 草の葉も平秋はくしく秋の風
 梅鉢し向物家のもゆき秋の風
 秋風の匂いもたぬね縄すきき
 秋風の匂いもたぬね縄すきき
 刺きけつゝさききあまの風
 物針や那さくすきき秋の風
 七さぬや麻糸あまの秋乃風
 何れもさかぬらし秋の風

る
 杉 風
 去 来
 高 信
 重 良
 岩 手
 思 実
 曲 聖
 心 典
 鉄 人
 支 考

秋風や縮めしもてゆき入
 さきき秋の葉もあまの秋の風
 あまの秋の葉もあまの秋の風
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入
 秋の風や縮めしもてゆき入

葉 子
 政 通
 子 邦
 許 公
 聖 聖
 本 白
 帆 聖
 岩 白
 葉 香
 子 尹
 許 公
 而 附

身入

身入を心風の志切身入

其角

戸

戸を心風の志切戸

小春

捨

捨を心風の志切捨

其角

神

神を心風の志切神

其角

霞

霞を心風の志切霞

其角

西務

於西務や二席をもちまうはくのみ
中よりらののやうに空方のふじ
秋空の東のうらさうすむを
あつらうとみまうと人あき方の

西務
北
小
芦角

後の
けお入

お入るものらうと京の路の
やあ入るお入る頃もあつた
あつた入るお入る頃もあつた

許
一
京

二
る

かたのあつた二つあつたの
二つあつた二つあつたの
二つあつた二つあつたの

去
去
好

十
の

稲

あ

稲あつたあつたのあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あ
其
去
和
棋
王
燕
山
そ
る
所

本

取

本給やして竹路の山をるの雲
お娘らのくも取神のぬくれり
結のふ一本給を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

具角
派
ト
映
山
水

田

田
結のふくも取を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

山
杉
丸
北

晚

晚
結のふくも取を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

支
考
改
進

焼

焼
結のふくも取を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

史
那
古
跡

海

海
結のふくも取を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

花
亭
春
亭

送

送
結のふくも取を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

馬
山
梨
燈

神

神
結のふくも取を信るは所り
結のくも取を信るは所り
里のふも取ありしおま給は

荷
言
丸
北
巴
道
柳
花

八

毒 通 約

八舞王歌のたぐひ一舞の如
きつとくの中にも種の下
い初や舞の足をかきさう
いしくおまじの志のあはせに

許六
舎奈
乙中
起波

心聲も旅のすくや約舞の
約むらひをほらけりまは
い取も唯まよふし約むら
お焼くも舞あまの流中約通
一の戸や衣のゆるし約むら
約舞や岩やまきり約むら
約舞のまきりまきり約むら

新言
西条
中野
許六
去来
其角
宝珠

放 生

れも舞あまの志のあはせに
尾をゆきまきり約むら
舞あまの志のあはせに
山女や舞あまの志のあはせに

松尾
中野
其角
乙中

通 文

さうさうの舞あまの志のあはせに
いしくおまじの志のあはせに

其角
乙中

鳴 子

あまの志のあはせに
舞あまの志のあはせに
川を流るるあまの志のあはせに

其角
乙中
可授

室山子

世新くも形くも朽めく室山子
道らうう捨てあつてか
種もの、懐きさうにる
を合はも部く、形くも
居風名の下やか、の身の
物のををひく、きささ
ちし、あのみ、あまが
一、懐もさうてか、の
山室を部く、ん、さ
遊ぬるも持きく、其、

山室
柳花
支考
酒故
そ故

引板

又山の麓をうと引板乃
又、室に、其、ま、あ、ひ、の、ま
曉、と、引、板、を、う、と、書、も、

史部
引板
社名

友名

う、友、名、の、志、も、山、向、の、友、名、
秋、も、友、名、を、す、る、友、名、の、友、名、
是、か、う、と、引、板、を、う、と、書、も、

友名
史部
大座

結

又、室、も、結、を、う、と、書、も、
結、を、う、と、書、も、結、を、う、と、書、も、
結、を、う、と、書、も、結、を、う、と、書、も、
結、を、う、と、書、も、結、を、う、と、書、も、

結
史部
大座

葉

時葉急急のすこやかたつしほ葉
久きもきつひとせしむるゆゆの
船代の果あてはしむるゆゆ

大葉
時凡
白葉

神

たつ神や市の中を過るゆゆ川
神をきく神代の方の神言ふ
たつたつて経えあるあつた
神神子徳也も家とて道なり

神言
たつ
神子

徳

物あきけ徳や国子たりの徳
徳事あたまあつたり徳は
たつたつたつたつたつたつた

徳事
たつ
徳は

河

かつたつたつたつたつたつた
川をたつたつたつたつたつた

河
たつ
たつ

鏡

てたつたつたつたつたつた
鏡子一たつたつたつたつた

鏡
たつ
たつ

足

あつたつたつたつたつたつた
地をたつたつたつたつたつた

足
たつ
たつ

急

急急たつたつたつたつたつた
急急たつたつたつたつたつた

急
たつ
たつ

漸 之 朝 之 寒

秋の朝 涼しき風が吹く

秋の朝

朝の光がさす 空は青く

朝の光

朝の空は 雲が流る

朝の空

朝の空は 雲が流る 朝の光がさす

朝の空 朝の光

新 橋 湯 酒

とあるは、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の
名は、新橋の湯酒の

其角
光堂
現升
呂結
大考
慮若
柳長

湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の
湯酒の湯酒の湯酒の

湯酒
湯酒
湯酒
湯酒
湯酒
湯酒
湯酒
湯酒
湯酒
湯酒

兵 交 庭

兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の
兵交庭の湯酒の湯酒の

去来
許六
甘山
事下
ハ指
好去
子口
明入
史部
石解

種 九 巻

秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 けの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく

秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく

掃

秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく

秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく
 秋の暮れゆくとき、あきらまじく、秋の暮
 れの光をみたりて、秋の暮れゆく

葡萄

葡萄はとうりなつて夏に熟す。味は酸味あり。秋に熟す。味は酸味あり。

葡萄

梨

梨は秋に熟す。味は酸味あり。秋に熟す。味は酸味あり。

梨

橘

橘は秋に熟す。味は酸味あり。秋に熟す。味は酸味あり。

橘

柿

柿は秋に熟す。味は酸味あり。秋に熟す。味は酸味あり。

柿

秋の

秋の

秋の味は酸味あり。秋に熟す。味は酸味あり。秋に熟す。味は酸味あり。

秋の味

一 葉 柳 歌

一葉のしづかに柳の影をさし
打つてさめぬさうに柳の影をさし
柳の影もさめぬさうに柳の影をさし
柳の影もさめぬさうに柳の影をさし

尚分
明え
絵え
鬼了
る破

葉のちうち中から葉柳は
ちう影もさめぬさうに柳の影をさし
柳の影もさめぬさうに柳の影をさし
柳の影もさめぬさうに柳の影をさし

とま風
おけ方
巻上
柳云
不明

草 丸 花

草の丸花をさし柳の影をさし
草の丸花をさし柳の影をさし
草の丸花をさし柳の影をさし
草の丸花をさし柳の影をさし

舞
まき
他年
改言
甲乙
乙中

女 糸 花

女の糸花をさし柳の影をさし
女の糸花をさし柳の影をさし
女の糸花をさし柳の影をさし
女の糸花をさし柳の影をさし

海
涼冠
梅盛
田手
草花

木 控

只世の心を隠さくのかさし
多うも法も小くは木控う形
多うもけし好くする所むりけ
相兵子幼きもむくきくを
味しきる島うつくれ向むる事
松の圃の中にもまきく木控
也まの春も咲くてむくい
さくらの村を木控のまきく

鳥
嵐葉
杉風
実那
山岳
都所
梨木
る所

草 目
丸
りた

名草の如くぬききりす
そ中しくしくきりす
る時やうくこのあめさ
草目

実那
山岳
岩

山 嶺
りた

山嶺の如くぬききりす
そ中しくしくきりす
る時やうくこのあめさ
山嶺

樹成
樹妖
巴流

大 友

子かき先世よりきりす
白珠の月をまきく

大友

蔓 珠
りた

物かき先世よりきりす
蔓珠の如くぬききりす

珠
珠
正

男 一

名草の如くぬききりす
男一の如くぬききりす

斜嵐
年

顔 報

葦やまき 垣おちす所の垣
報鳥や鳥のくしの花の吹
あまきうちをまきしゆきりし花のを
報鳥のまきしゆきりのくし
葦やまき 垣おちす所の垣
あまきうちの種とる人の古花の
報鳥や鳥のくしの花の吹
あまきうちのまきしゆきりのくし
報鳥のまきしゆきりのくし
あまきうちの種とる人の古花の
報鳥や鳥のくしの花の吹
あまきうちのまきしゆきりのくし

葦 杉風
報鳥 笑邦
あまき 巴嘉
まき 風喜
垣 和乃
おち 平更
す 木因
所の 戈磨
垣 磨え
鳥 柳枝
の 夕霞

葉 秋 葦 葉

葦やまき 垣おちす所の垣
報鳥や鳥のくしの花の吹
あまきうちをまきしゆきりし花のを
報鳥のまきしゆきりのくし
葦やまき 垣おちす所の垣
あまきうちの種とる人の古花の
報鳥や鳥のくしの花の吹
あまきうちのまきしゆきりのくし
報鳥のまきしゆきりのくし
あまきうちの種とる人の古花の
報鳥や鳥のくしの花の吹
あまきうちのまきしゆきりのくし

葦 杉風
報鳥 笑邦
あまき 巴嘉
まき 風喜
垣 和乃
おち 平更
す 木因
所の 戈磨
垣 磨え
鳥 柳枝
の 夕霞

穂 乃 九 穂

けいこうの地のりあうり穂のふ
ふりやうのふもあうり穂のふ
ふりやうのふもあうり穂のふ
穂所のふりやうのふもあうり穂のふ
穂のふりやうのふもあうり穂のふ

土乃
山乃
乃乃
乃乃
乃乃

まうりてもあうり穂のふ
穂のふりやうのふもあうり穂のふ
穂のふりやうのふもあうり穂のふ
穂のふりやうのふもあうり穂のふ
穂のふりやうのふもあうり穂のふ

乃乃
乃乃
乃乃
乃乃
乃乃

糸 瓜

あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ

長切
瓜

あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ
あうり穂のふりやうのふもあうり穂のふ

瓜
瓜
瓜
瓜
瓜

蓮の葉

蓮の葉やふたむねのあらうり
てうすのうらむもちいれり

藤原
若菜

蘭

蘭の葉やふたむねのあらうり
らよの葉やふたむねのあらうり
ふたむねのあらうり

坑隣
東坊
巴都
石明

花さそ

花さそやふたむねのあらうり
花さそやふたむねのあらうり
花さそやふたむねのあらうり

乙女
石明
下坊
石貴

花さそ

花さそやふたむねのあらうり
花さそやふたむねのあらうり
花さそやふたむねのあらうり

山重
乙女
之根
花さそ

花さそやふたむねのあらうり
花さそやふたむねのあらうり
花さそやふたむねのあらうり

花さそ
柳枝
石貴

薄

紫苑

志らるるの庭物なりと云ふは
花をきき踏ふつとぬくおはる
年くは古根のさきより
つらき花のたぐひなき
花の津のりぬらひなき
庭あつては花すきなき
約物なりぬらひなき
船ひきの二掃さつす

七人きんくわは花の
冊物ありては花の

其角
花
終州
牧亭
去来
野亭
半飯

梅華
る物

紫

紫

世をゆくは花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の

花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の
花の

梅華
る物
野亭
去来
牧亭
終州
花

花
花
花
花
花
花
花
花
花
花

風紀

技巧戸子蒲の香あり風ぬちし
中船の舟子も徒一風紀
風紀の元如くはしるを風の香

海味
中船
舟子

新改

新改のわすの事は針程も
杖のたよりを物りや新改
いんやわあまうと垣と秋の神
夕のまも候もあしけり
新改のちりもあまのあひ
いんやわあまうと垣と秋の神
新改のわすの事に立給也
いんやわあまうと垣と秋の神

新
万手
車庫
巴野
まじ
まじ
まじ
まじ

花

お花はくさし花のさきも花の
お花はくさし花のさきも花の
お花はくさし花のさきも花の
お花はくさし花のさきも花の
お花はくさし花のさきも花の

其
花
花
花
花
花

輪

輪の中を世の中も
輪の中を世の中も
輪の中を世の中も
輪の中を世の中も
輪の中を世の中も

其
輪
輪
輪
輪
輪

廿七
善終

川船わらうし強きく生人の心
死をとりて船ゆく是れ善終の善
廿七の徳也ゆひく善の心あり
舟の善や舟をとりて善の善

龜子
お枝
改運
文子

善果

善果の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善

善
其
光
文
印
山

りかき善くして善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善
善の善も善なり地も善の善

二
和
支
端
秋
文
文
巴
文
文
文

鹿

あつたを枯らすを鹿の鹿
ひくくを鹿本とて鹿の鹿
ひくくを鹿本とて鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿

鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿

末

末の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿

鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿

枯

枯の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿

鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿

馬

葛

葛の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿

鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿

梅

梅の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿

鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿

女

女の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿
鹿の鹿を鹿の鹿の鹿

鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿
鹿の鹿

芋

芋の葉はゆき霜のやき白
山畑の芋はあまの味は
子をかき芋焼くはあまの味

山芋
芋焼
芋煮
芋十

つらり

つらり芋の味はあまの味
芋の味はあまの味

芋焼
芋煮

かほ

かほ芋の味はあまの味
芋の味はあまの味

芋焼
芋煮

木犀

木犀の葉はゆき霜のやき白
木犀の葉はゆき霜のやき白

木犀
木犀

木の葉

木の葉の味はあまの味
木の葉の味はあまの味

木の葉
木の葉

栗

栗の葉はゆき霜のやき白
栗の葉はゆき霜のやき白

栗
栗

板

板の葉はゆき霜のやき白
板の葉はゆき霜のやき白

板
板

葺

松葺の志くぬ木の葉のなをうけ
神坐の和やうさの香絶ぬ秋の香
松葺の和やうさの味
まのきりや澄も清は一はり
神葺の香に併あす少る白うね
るの香のちまこいふ葉の葉うね
まのきりやうさの味
まの葺の香うねりけるは葉の味

と理
桂坊
法爾
香
松志
去来
法蓮

葺

葺葺の和葉の生る取る葉かゆと
まの葺の和葉の味と葉の香
うねりけるは葉の味

其の角
山葺

栗

栗の葉を揃うつあふ山葺り
いふ葉の味なるを葉の味はいつく
焼ぬ葉の味なるを葉の味はいつく
いふ葉の味なるを葉の味はいつく
葉の味なるを葉の味はいつく

其の角
又八
楓
柳

蕪

蕪の葉の味なるを葉の味はいつく
いふ葉の味なるを葉の味はいつく
いふ葉の味なるを葉の味はいつく
いふ葉の味なるを葉の味はいつく

其の角
有者
去来

糸

紅

葉

分入りおきつゝいふはけおれり
そまほらまほら貴とつふまのれ
物のおまほらまほらまほら

かろおきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ

西
糸
巨

其
支
一
柳
入
而

虫

秋
蟬

おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ

おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ
おきつゝおきつゝおきつゝ

乙
怒
句
名
思
文
春
る

大
映

秋の情

遊ふくきけき遊ふの秋の情
其の情をよみては秋の情
秋乃情を何れも秋の情

秋の情
秋乃情

秋の情

秋の情をよみては秋の情
秋乃情を何れも秋の情

秋の情
秋乃情

秋の情

秋の情をよみては秋の情
秋乃情を何れも秋の情

秋の情
秋乃情

秋の情

秋の情をよみては秋の情
秋乃情を何れも秋の情

秋の情
秋乃情

秋の情

秋の情をよみては秋の情
秋乃情を何れも秋の情

秋の情
秋乃情

秋の情

秋の情をよみては秋の情
秋乃情を何れも秋の情

秋の情
秋乃情

碑 境 橋 以 水 古

碑の意なくも法く始るは初
かゝるまの古の道中境のこ
橋境の後をひゆまをんの上
かすかゝの古の物の中
このはまの古の道中境のこ

北境
流石
号中
史部
舟中
望理
感久
不卜
以子
以部

個 渡 予

このはまの古の道中境のこ
橋境の後をひゆまをんの上
かすかゝの古の物の中
このはまの古の道中境のこ

御所
杉山
柳花
去来
原冠
若伸
珍蹟
史部
舟中

一尾

船の中のとれし時舟のた
りの後又とほしる舟のた
つ舟のたつ舟のたつ舟のた
あつしつとつとつとつとつ
又つとつとつとつとつとつ
たつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ

舟のた
つとつ
つとつ
つとつ
つとつ
つとつ
つとつ
つとつ
つとつ
つとつ

勢

歌

本歌

世の中を勢のたつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ

凡北
水固
揺凡
そ勢

勢をくわ入るつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ

凡北
水固
揺凡
そ勢

あつとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつ

凡北
水固
揺凡
そ勢

鶯

鶯の目の今や華をぬと啼く
その声はひくくあはれしく
西木の穂をさあぶりさるる啼
かみすくも舞のふりか
那く我はははくもあはれ
さうりつ時早のふもあはれ
さうりのふり啼らんらま
あはれしくあはれしく
あはれしくあはれしく

鶯
支考
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯

鶯

こねて啼て十ねてうら
てをや啼かきて

鶯
鶯

鶯

鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ

鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯

鶯

鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ

鶯
支考
山
山
山
山
山
山

鶯

鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ
鶯の啼きあはれ

鶯
支考
山
山
山
山
山
山

鳩

集

集

鳩の如く和嶺採りしもの如きは田
大なり申すにあたりて平の如く
地く少くは鳩如く其の如くあり

海鳥と
月舟
之道

集の如くは鳩を採りしもの如きは田
志うら海の中を採りしもの如きは田

持え
身全

ひれと集 鹿を採りしもの如きは田
追ふて採りしもの如きは田の如く
北の如く採りしもの如きは田の如く
南の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く

北
北
去
正
涼

集の如く採りしもの如きは田の如く
友らとの採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く
集の如く採りしもの如きは田の如く

集
集
集
集
集
集
集
集
集
集

秋も生かす川へ流るる水の如
きものそけいさきくはくしき
のそよふそよふそよふそよふ
秋のそよふそよふそよふそよふ
秋のそよふそよふそよふそよふ

酒
たき
石
野
酒

神 雲

古人ある白頭を白く染

ぬる部

南 磯 行 旭 登 亀 足 校 合

神中やまの煙のそよふのそよふそよふ
はくしきくはくしきくはくしきく
神中やまの煙のそよふのそよふそよふ
はくしきくはくしきくはくしきく
神中やまの煙のそよふのそよふそよふ
はくしきくはくしきくはくしきく

芭蕉
其角
柳
野
子那

明

志
中
記

海山のなる侍しとて好くたうり
 久波を切て新明くさう南
 那波にも等なるもあはてしやう
 出つてとそ秋も水も好く交り
 山常真の格下出らぬんやうか
 引つけたりやうなるの、は後
 ぶるして北のうけり、之うふ

乙明
 本由
 秋の
 使部
 湖夕
 去来
 出ふ

沖時

志す起るも雪のくろく雪の方
 りもしくい傘秋あはれをさ
 一志起るも東沖のうぬし

去来
 雲指
 蓮口

沖志のまじりも小葉を叩き
 りふたりく人も年暮る沖時
 昔の羽もかいつぬらぬた
 新其葉の宿根のま下やう
 けくろり垣の結月和沖志
 物白くも粒降るもはく
 新産やももくぬらぬ沖時
 あはれとて好くあはれり
 り計け葉の渾色を常む沖時
 古御子さる心移ありはく
 也あやすこく一沖時好く本履
 志心算の何く好る沖時

去来
 海串
 体中
 湖夕
 乙明
 乙中
 乙明
 乙中

向の系を考案盤のうたや妙計の
みの事法中の子らるるくみせ
ゆいしれ小端の草此若夫加減
旅亭も七よ草野の御所を

柳花
を凌
馬草
空守

志九

志の事あつ田のあつ株のくら母ら
ねるの事記官をうんする時
雲うらもはくさあゆみいれ
一しめれ又くら地は、時あう南
あまうり仲の志の道のり
一うまぬまの事文の地し
地のひわししゆり時あう

其角
去来
露沾
土草
杜園
高久

千細子入り清り志の事あつ
くましれに存を渡りうら
あおしめれ清くをいり
地の事あまうりしと
一うかろ竹田の里の志の
了地の事あつりしれ
まき葉の事あつりしれ
志の事あつりしれ
地事あつりしれ
地事あつりしれ
地事あつりしれ
地事あつりしれ
地事あつりしれ

米山
如存
岩草
地事
乙事
地事
地事
地事
地事
地事
地事

みみ

潮々を結ぶるがは志あるは
志あるは和を事とし其の志は
あさうにの理を物論志あるは
志あるは事あり千載のしあはれ
出さずと存する事あり其の結の
新田に種あり種あり志あるは
風の地も事あり事あり其の
一僕の志あり事あり其の
志あるは事あり事あり其の
川中あり種あり種あり志あるは
廣海あり種あり種あり志あるは
山あり事あり事あり其の

此の
元北
湖
其角
志
山川
風
史邦
志

みみ
れ

寒
み

足る事あり事あり其の
志あるは事あり事あり其の

志

松林よりすくひらとみみれ
川あり事あり事あり其の
心あり事あり事あり其の
志あるは事あり事あり其の

志
史邦

志あるは事あり事あり其の
志あるは事あり事あり其の

志

和歌

ひらきしとさるやあはれの捨つる
新しきとさるやあはれの捨つる
ちとさるやあはれの捨つる
鶯の尾のさるやあはれの捨つる
杖のさるやあはれの捨つる
ふらけのさるやあはれの捨つる
五葉のさるやあはれの捨つる
捨指のさるやあはれの捨つる
掃ふさるやあはれの捨つる
湯あはさるやあはれの捨つる
新玉のさるやあはれの捨つる
菅のさるやあはれの捨つる

鳥
岩
土
耕
卯
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
子
丑
寅
卯
辰
巳
午
未
申
酉
戌
亥

和歌

あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる
あはれとさるやあはれの捨つる

鳥
岩
土
耕
卯
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
子
丑
寅
卯
辰
巳
午
未
申
酉
戌
亥

六

春 小

時あるまのあつて一日の春をうけ
てうきうきとあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて
さうさうあつてさうさうあつて

改訂
増補
整理
監修
発行
印刷
製本
編集
校閲
印刷
製本

霜 師 走

霜の降りし秋の夜は
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに
静かに静かに

何よけ師走の市は
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい
賑わい賑わい

霜雪
静寂
閑静
清静
幽静
恬静
素静
淡静
素淡
素雅

冬至

冬のしほはあつたはあつたおとすか
雪のついでにうらなれたるうら
門前のゆきもあつたあつた

乙州
朱井
九井

神送

そのかたはあつたのきもあつたあつた
月日はあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
いりあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

野川
目録
降五
本取
中取

神迹

神迹あつたあつたあつたあつた
神迹あつたあつたあつたあつた
神迹あつたあつたあつたあつた

巴登
玖復

神皇

神皇あつたあつたあつたあつた
神皇あつたあつたあつたあつた
神皇あつたあつたあつたあつた

東平
東吉
思身

経子傳

経子のあつたあつたあつたあつた
経子のあつたあつたあつたあつた
経子のあつたあつたあつたあつた

其角
史部
白崎

子系

子系のあつたあつたあつたあつた
子系のあつたあつたあつたあつた
子系のあつたあつたあつたあつた

山若
系子
史部

吹草

あつらんは草あふのおくくは
市火焼の草あふのくは村あ
解あ村あ草あふのくくは

李由
智原
下風

神樂

あつらんは草あふのおくくは
市火焼の草あふのくは村あ
解あ村あ草あふのくくは

其角
去来
史部
其角

か
ら

あつらんは草あふのおくくは
市火焼の草あふのくは村あ
解あ村あ草あふのくくは

其角
去来
史部
其角

十
夜

あつらんは草あふのおくくは
市火焼の草あふのくは村あ
解あ村あ草あふのくくは

其角
去来
史部
其角

十
夜

あつらんは草あふのおくくは
市火焼の草あふのくは村あ
解あ村あ草あふのくくは

其角
去来
史部
其角

忠命海 志 戒 忘

忠命海神の御名は海主神
 神も杯も御名は海主神
 昔は海主神の御名は海主神
 一人の御名は海主神
 海主神の御名は海主神
 海主神の御名は海主神
 海主神の御名は海主神
 海主神の御名は海主神
 海主神の御名は海主神

海主神
 海主神
 海主神
 海主神
 海主神
 海主神
 海主神
 海主神

御名 御名 御名 御名

御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神
 御名は海主神の御名は海主神

御名は海主神
 御名は海主神
 御名は海主神
 御名は海主神
 御名は海主神
 御名は海主神
 御名は海主神
 御名は海主神

風

風子 窓の竹やうは松 竹の如
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間

其角
言ふ
子英
子梅
嵐雪
志考
林如
此竹
凡兆

十四

柳枯

木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間
木の葉の如く 吹く山の間
風の音も 吹く山の間

一
之
連
柳
而
怪
誰
誰
人
花

真 子

妻をうつすをを驚くおのゝこ
おのゝこあつたおのゝこおのゝこ
あつたおのゝこあつたおのゝこ

東園 水因 たる

帰 花

帰花をうつすも妻を驚く
おのゝこあつたおのゝこ
あつたおのゝこあつたおのゝこ

其角 山 多所 明久 多所 言久 乙生

批 把

批把をうつすも妻を驚く
おのゝこあつたおのゝこ
あつたおのゝこあつたおのゝこ

山 曲 一 曲 曲 曲 曲

山 子

山子あつたおのゝこ
あつたおのゝこあつたおのゝこ
あつたおのゝこあつたおのゝこ

尚白 其角 崇友

か
ま

かまのうしーいりよきつたよき
いよあふる百角をいよきつた

出
か
ま

か
ま

かまを結ぶかまのあつたかま
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた

か
ま
あ
つ
た

か
ま
あ
つ
た

かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた

か
ま
あ
つ
た

か
ま

かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた

か
ま
あ
つ
た

か
ま

かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた
かまのあつたかまのあつた

か
ま
あ
つ
た

か
ま

爰 條

指 尾 記

爰條也志行...
 水...
 ...
 ...
 ...
 ...

爰
 條
 水
 ...

茶 乃 花 葉

茶の...
 ...
 ...
 ...
 ...

茶
 乃
 花
 葉

石 菖 竹 蕙 桔

河の骨に... 石菖の石
 菖の石に... 竹の石
 蕙の石に... 桔の石

如新
 彦元
 朝存
 神升
 吉望

かれ... 竹の石
 蕙の石に... 桔の石
 竹の石に... 蕙の石
 桔の石に... 蕙の石

苦瓠
 三研
 三研
 三研
 三研

山 石 川

山石の石
 川の石に... 山の石
 川の石に... 山の石

山の石に... 川の石
 山の石に... 川の石
 山の石に... 川の石

利牛
 杉風
 岩香
 岩香
 岩香

卷十八

大相川 には 芥菜 葱

新垣に少時と暮るる大相川
も女に投て運つる大相川
多勢の河を運く大相川
好むの舟をぬれり大相川

新垣 大相川
初足 運

新出せやその大相川の
そはくらの秋のふれり大相川
若きまは河をぬれり大相川
いぬし空をぬれり大相川
風のふれり大相川
ひとのり大相川

新出 大相川
初足 運

麦 穂 新

麦の穂は新の穂を大相川の
世を運つて暮るる大相川
のやうに河を運つて大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川

麦の穂 大相川
あまの穂 大相川

あまの穂を大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川
あまの穂を大相川

あまの穂 大相川
あまの穂 大相川

鴨

久しきるを令あふ親のお鴨うぬ
く入るをよきとすし比の鴨
けしむや直海の鴨のつはうい
夜ありしや鴨のぬきうき物哉
く鴨をたえ追うるはく鴨
鴨を食のゆめしあてうあ中ひ
う獲よ鴨もぬくぬ羽まぬ
鴨を獲よやうまを捨てたあ年
は年月のあふあはああ鴨
鴨時や風はあまむいぬの風

大草
北枝
机竹
西木
年枝
怒風
去来
杜若
る印

北を
尖る

か
か

木
龜

み

の
隈

後のきんらんをちかむ北をぬき
舟のえのくわんをのゆぬぬ
代士のえんを牛や北のあ
押さうのいりぬもくさう神鬼
かかつてあふあをそて又まぬ
針細のぬの下やふはくぬ
木龜やゆりぬはあまのほら
こくのゆや木の葉のあま
木龜の時ぬよあまをねん
将ちぬてあうらう人ぬの隈
今ま世をねむりぬやぬの隈
今ぬもはくぬぬぬぬの隈

椽言
木印
里圃
翁
案年
其境
ゆ尋
以枝
真角
旦菜
石明

庭鳥

将鳥

死をまて探りぬらん
庭鳥の羽の結をまはは
ひをみよふる庭鳥
庭鳥の羽の結をまはは
庭鳥の羽の結をまはは

思兼
大草
里園
其等
琳琳

前にもなる所を
将鳥の神遊を
将鳥の神遊を
将鳥の神遊を
将鳥の神遊を

実邦
高公
支考
卯也
作者
不詳

夜鳥 其 庭鳥

庭鳥の羽の結を
庭鳥の羽の結を
庭鳥の羽の結を
庭鳥の羽の結を
庭鳥の羽の結を

庭鳥
丹丘
尺素
泉石
如紅
風符
二三
其等
其等
其等

所 河 脈

脈をくちかきまらんとてあふれ
其の枯れ脈をくちかきまらんとて
脈をくちかきまらんとてあふれ

あふれ河も脈をくちかきまらんとて河脈
くちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈

其の
不ト
嵐雪

其の
一網
其の
其の

七五

所 河 脈

あふれ河も脈をくちかきまらんとて河脈
くちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈
脈をくちかきまらんとてあふれ河脈

其の
不ト
嵐雪
其の
一網
其の
其の

世々

松葉の葉も多敷いなるに
流網の止ぬるも多敷いなるに
日よけしと申すは
保老のひらき
みぬきぬき
活るか
世々
大勢
人知
後安

其角
去来
流春
利牛
孫六
金屋
本導

かた川の一
門
若
灯
鳴
如
室
其
室
婦
流
流

此足
角之
桂之
西之
松之
乙之
探之
而之
物之
戲之

火 燧

燧の火は山の麓のたき火や道火燧
をこくと地はしらむくくつう
物やうすうくまき火燧は
も性のあつたかたはあつた
あつたあつたあつたあつたあ
山やんたきやうりはこきあつた
火入て火入しきあつた火燧は
燧の火をききあつたあつたあ
山やんたきやうりはこきあつた
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ

燧
火燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧

十九

火 埋

埋火の火は山の麓のたき火や
道火燧をこくと地はしらむく
くつう物やうすうくまき火燧
はも性のあつたかたはあつた
あつたあつたあつたあつたあ
山やんたきやうりはこきあつた
火入て火入しきあつた火燧は
燧の火をききあつたあつたあ
山やんたきやうりはこきあつた
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ

燧
火燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧

指

おのの火や暖くるのぬこへ人
指のようやあさうに啼きうす
けこの火に親を足さけひ舞
あまの火に親の色のあつら
煙をさぐる命ついで 指の殿
形らばい指方子あまうまう後

大平
安川
吉集
探志
川合
る命

炭 空

すこ空のよ負の枝の倒目りう
山灰はゆわゆる忽如と枝のと
ままかはるや柴のふくくおろ夕燈
山灰焼のひりうとあまん空の
ままやまやゆり行くままひりう

元兆
風律
田人
其本
柳古

炭

山灰やまもあまのたのむ
すこ空の山一葉は白ひり
かこ山灰まらふの本のまう
山灰たまむまを之水に夜年
あまやまの海にありぬてや
いさやまのまらうあまのま

潤務
百叩
其角
光中
好口
我舟

炭 責

山灰やまもあまのたのむ
すこ空の山一葉は白ひり

其角
好口
我舟

お乃

いあやや寝のさみりておのの
はあはらの御ささし通すおのの
あー猫のかりあすおわふおの
志はししををををのさし
相のまのあをささしおのの
多々柳やあしあしおのの
おのののののののののの
みのおのののののののの
晴るるるるるるるるるる
庭の家のおかかかかかか
門扉の古の古の古の古の

其の
杉
大草
土
乃
乃
本
母
而

おの

寒の
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの

高
深
柳
花
年
年

おの

靴鞋も
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの

高
深
柳
花
年
年

おの

寒の
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの
おのののののののののの

高
深
柳
花
年
年

字 彙 八 臘

字、おまゝにちのえの
 かんじをわづらひし
 實にたゞをきかぬ
 かんじをわづらひし
 字、おまゝにちのえの
 かんじをわづらひし
 實にたゞをきかぬ
 かんじをわづらひし
 字、おまゝにちのえの
 かんじをわづらひし
 實にたゞをきかぬ
 かんじをわづらひし

其角 中由 許六 岩七 寺住 乙孝 加美 支考 許六 坊六 坊九

臘 九 日の みの 夜の 用

臘、おまゝにちのえの
 かんじをわづらひし
 實にたゞをきかぬ
 かんじをわづらひし
 字、おまゝにちのえの
 かんじをわづらひし
 實にたゞをきかぬ
 かんじをわづらひし
 字、おまゝにちのえの
 かんじをわづらひし
 實にたゞをきかぬ
 かんじをわづらひし

氷乃 吾索 友五 字の 其角 坊六 坊九

餅 楯 衣 砧

その餅もさうなれば、一瞬のとき
瞬つては火のくんと、梓の光
ゆらぎは火をのこり、田舎の
餅は、さかあがり、さかあがり、
ゆらぎは、さかあがり、さかあがり、
餅をのこり、さかあがり、さかあがり、
目も、さかあがり、さかあがり、
何れも、さかあがり、さかあがり、
文も、さかあがり、さかあがり、
衣も、さかあがり、さかあがり、

餅の
梓の
田舎の
さかあがり
さかあがり
さかあがり
さかあがり
さかあがり
さかあがり

節 分 元 年 半

節分は、我の心、さかあがり、
元日は、我の心、さかあがり、
半は、我の心、さかあがり、
節分は、我の心、さかあがり、
元日は、我の心、さかあがり、
半は、我の心、さかあがり、
節分は、我の心、さかあがり、
元日は、我の心、さかあがり、
半は、我の心、さかあがり、
節分は、我の心、さかあがり、
元日は、我の心、さかあがり、
半は、我の心、さかあがり、

節分
元日
半
節分
元日
半
節分
元日
半
節分
元日
半

年本想

年亦想ととも様とて好しう
みくもや様のをけり年亦想

年亦
柳店

忘年

世つれを年につれすも機嫌所
年つれを年につれすも機嫌所
思好を死にせり年につれす

忘年
竹亭
太考

年別

別年や待ちし神はそ人年
別年や待ちし神はそ人年
行せし年を年を年を年を
別年や待ちし神はそ人年

年別
神人
太考

国元

国元を年を年を年を年を
一も世を年を年を年を年を

国元
松徳

春縁

春縁を年を年を年を年を
春縁を年を年を年を年を

春縁
松徳

春去

春去を年を年を年を年を
春去を年を年を年を年を

春去
松徳

年

年を年を年を年を年を
年を年を年を年を年を

年
松徳

大 三 日

終りたりてありて大なる
大なる定ち世のゆくゆく
大なる親子縁のさし
け半に聖えりておし
年のむやんは是の十
くなく大なるの
年のむやんは是の十
くなく大なるの

其角
子半
去来
紋足
高年
る力

、 一

山 暮

子と協し
以て
く
山
結
暮
向

其角
高年
去来
紋足
高年
る力

切實の御人年のおれ
くもく一精飲やさし
つるの星や梅子赤心
誇るや知年入もあやう

醉山
梅子
梅子
梅子

年之内春

年のうちに踏む春の
連歌師の志すや
そのの春相くま
春の心を足し
年のうち遠き

春の
許
志
去
梅

御神歌

君んらや家も入る
草花のかよふ
吟らふよきと
山ハ一のれ大根
古昔は
星ささる
木かしの
雪あ
喰
用

花
一
春
也
也
也
也
也
也
也

旅夜より寄望海客の文を
みよる中望海客の北さつと
鳴也の縁足あてせしるのこ
つ離れし思と云ふつは海客
の海客の舟につく中望のま
そふを子新舟と申おそら
下言中望つむとのあの海
廻代寄子中望の古すくぬ
ありぬまぬぬのぬぬぬぬ
中望のぬぬぬぬぬぬぬぬ
中望のぬぬぬぬぬぬぬぬ

望海
望海
望海
望海
望海
望海
望海
望海
望海
望海

飯くめて多かりしはさく川
あつたりの船かきさるまの
まふ海客つら思物あか
ら

不展
其角
忠か

君



附

あるある降志あるの日
よ母くは海客の船かき
師の寄望望の船かき
え録古人の寄望望の船かき

安んずるを初めて去りぬるを末とす南極の極心の七あり
新撰のありて板子紙とす方の歌ふにたてて形正しくし曲子
残るて今人ある歌といふを嗣人とすこの歌の七あり
斗法とすより形正しくその歌子ありして社友のあり得る
年よりいふありていふに漸くつりぬるを方とす
しそより又實あるを歌とす終る終るを東部とす

松島起草亭二氣八達



續篇今人曲の歌ぬ白集 乾坤二書

中巻

一巻一巻に曲集あり七十二巻あり
いつとも造化のあり所ありて安んず
ちちのつらさありて安んず
安んずぬるをよく造化のあり然
ちちのつらさありて安んず
安んずぬるをよく造化のあり然
安んずぬるをよく造化のあり然
安んずぬるをよく造化のあり然
安んずぬるをよく造化のあり然

天明七丁未年諸集開板
天保十己亥年四月再板

江戸本石町十軒店

萬笈堂英大助板

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助藏版俳書目錄

○類題之部

俳諧發句五百題

春秋庵白雄房撰

小木二冊

同

新五百題

田喜庵護物撰

中本二冊

同

新々五百題

全撰

全二冊

同

名所千題集

全撰

全三冊

同

今人東風流

洞海舎涼谷撰
一具庵一具按

全二冊

同

十万句集

全撰
全按

全四冊

同

故人五百題

松露庵撰

小木二冊

同

續故人五百題

一具庵一具撰

全二冊

同 類聚 八景園家松撰 中本二冊

同 今人五百題 八雲東溟輯 涉壁千輪校 小木二冊

此書は古人の歌子多くして今迄方よりよる不及なりとの言ふは家の書なり
余は之を集むる當時は行一瞬ふん等りしはかたむ生をたうらうらう徳利の如し

同 類題 中本二冊

同 古今撰 蕪庵慶守撰 全一冊

同 新類題 六合庵万里撰 全二冊

同 萬題集 一名題砂子 冬至庵康年輯 八雲東溟校 全四冊

世に古集ありて古今をまじりては其書を甚だ難しと云ふは其言人の
数る家とせば世に古集ありては其書を甚だ難しと云ふは其言人の
今調をとりは行一瞬ふん等の言ふは其書を甚だ難しと云ふは其言人の
らくは其書を甚だ難しと云ふは其言人の

同 秋葉集 仁比多居雅嶺輯 小木四冊

俳諧 田毎の日 桃隣大入關 全一冊

同 言笛集 錦舎素柳編 笠栖素行校 横本二冊

今人發句集 禾木園校輯 全二冊

四季發句帳 艸丸大人撰 全一冊

白話七五三 全一冊

○假名遣物 春登上人撰 全一冊

万葉用字格 長野美波田大人撰 全一冊

對照假字格 春登上人撰 折本一冊

音便假字格 春登上人撰 小木一冊

○句集之部

嵐雪句集 一稱玄峰集

全二冊

其角句集 坎窩久藏集

小木二冊

蓼太句集 全六冊

吏登句集 全一冊

巢兆句集 全一冊

完來發句集 全二冊

梅翁宗因發句集 全二冊

太無發句集

存義發句集

獅子賦發句集

柳居發句集

糗粒瓶 甲斐州丸集

全一冊

葛里句集 志句口集

全一冊

護物七部集

小木二冊

乙二七部集

全二冊

饒舌錄 元木綱大入著

全二冊

三吟未來記

全一冊

俳諧寐志 春秋庵白雄著

全三冊

今七部集 冬至庵庚年撰

全二冊

今人附合集 永木園校輯

全四冊

芳草集 同

芦の心吹のり 田喜庵輯

全二冊
全一冊

○季寄之部

戀の棗 葎雪庵北元著

小本二冊

俳諧手挑灯 一名俳諧初心

中本二冊

同 掌中小本

全一冊

俳諧袖鏡

寸珍一冊

季寄便覽

一枚撮

のりこみ

横本一冊

俳諧通言

小本一冊

○文之部

新編俳諧文集 あつちまのふ
文をいり

全一冊

俳諧變躰一覽

両面一枚撮

袖定規 表俳諧定坐変体之因

七初集その外古哲俳社の変化のりを産するをいり
ては風俗の自主を一目にえり

俳諧礎

○掌中寸珍物 海島寸珍物
集州寸珍物

掌中五百題初編

集州初編

同 二編

集州二編

三編

芭蕉發句集

其角發句集初編

二編

三編

嵐雪發句集初編

二編

乙由發句集

蓼太發句集初編

二編

新五百題初編

一編

三編

古今撰

猶追々出

俳諧一葉集

同 薄用摺

同 續今人五百題

涉壁為山輯

掌中故人五百題

松露菴主人著

集卅三

集卅四

集卅五

集卅六

集卅七

集卅八

集卅九

集卅十

集卅十一

集卅十二

集卅十三

集卅十四

集卅十五

集卅十六

前編五

後編四

全二

全一

編

編

編

編

編

編

編

編

編

編

編

編

編

編

冊

冊

冊

冊

俳書畧目

芭蕉翁略傳 附錄附

近世俳諧十家類題集 過日庵祖郷輯

同 名家類題集 同 著

續枯尾花集 小菘庵確嶺著

類題狡菘集雜之部 同 輯

諸國名家集 笠栖素行輯 安房之部 諸國追々出版仕

古今五百題 寸珍本 全二冊

俳諧獨警古 全二冊

俳諧道の便 全二冊

俳諧戀の禁 全二冊

三都

京都三条通榭屋町 出雲寺文次郎

大坂心齋橋北久太郎町 屋喜兵衛

同 安堂寺町 屋太右衛門

同 博勞町 屋茂兵衛

同 江戸芝神明前 屋嘉七

同 日本橋通二丁目 屋新兵衛

同 同 屋佐兵衛

同 通壹町 屋茂兵衛

同 淺草茅町二丁目 屋伊八

同 本石町十軒店 大助藏板

同 下谷御成道 英藏

書林

發行

